

Only Connect : Virginia Woolf と E.M. Forster

村松 加代子

〈はじめに〉

Bloomsbury Groupについては、以前、「Bloomsburyの知的貴族たち」¹と題する拙論で詳細に論じたことがあり、本稿はそれを前提とした研究成果であることをあらかじめお断りしておきたい。そのときの論文では、Bloomsbury Group研究のいわば通過儀礼として、その全容の把握に終始したが、本稿はその各論第1弾ともいべきものである。Bloomsbury Groupの構成員は、その殆どが美術関連の者たちであるが、筆者は、その中であって文学の著述を生業とする数少ないメンバー、すなわち、Virginia Woolf, Lytton Strachy, E. M. Forsterの3人にこの順位で格段の関心を寄せてきた。これら3人の作家のうち、WoolfとStracheyについては、すでに何度か私見を公表する機会があったので、今回はWoolfとForsterのふたりを取り上げることとした。かれらは知り合った当初から、互いの作家活動に少なからぬ関心を寄せ、その後もその度合いが増していったことは、それぞれが後年、互いの著作をめぐる評論を著しているという事実、さらには、Forsterの著作中、その8編までもが、Woolf夫妻の経営する出版社The Hogarth Pressから刊行されているという事実からも十分窺われる。

Forsterがこの世を去ってから30余年になるが、ごく最近、新資料²が刊行された。本稿は、この新資料を手掛かりとすることによって、Woolfのエッセイ、“Mr. Bennett and Mrs. Brown”の中で有名になったある「日付」について、新たな解釈の道が拓かれるかどうかを検証しようとするものである。

〈"December, 1910"の意味するもの〉

Woolfの“Modern Fiction”が、モダニズム文学を論ずる時に必ずといっていいほど引き合いにだされるマニフェストであるとするれば、同じ彼女の手になる“Mr. Bennett and Mrs. Brown”のほうは、はるかに読み

易い。それというのも、こちらの方は、前者とは違って、Cambridge大学の文学団体、「異端者会」(‘The Heretics’)での講演原稿を基に書かれているからである。換言すれば、これは、できるだけ抽象的な表現を避け、具体例を数多く挙げながら“Modern Fiction”の論旨を敷衍した評論と言える。その中で、Woolfはまず、作家とは、その性別に関係なく、鬼火——私たちをつかまえて書いてごらん、と蠱惑的にけしかけの幻の人物たち——について唆され、かれらの追跡に身をやつす者たちであり、これはまたArnold Bennettも認める場所であると述べている。そして、人間は誰しも性格の鑑定家であり、この鑑定の鍛練こそはわれわれの日々の問題解決に大いにあずかっているのだが、作家と世間一般の人との違いがあるとすれば、作家のほうは、人生の実際的な目的のために相手の性格について十分知った後でもなお、性格そのものには何か永久に興味をかきたてるものがあると信じこみ、そのために、性格研究と性格描写に凄まじい執念を燃やす輩であると解説している。

ところが、この“human character”というのがここにきて変化したことは間違いないとして、Woolfはつぎのように記している——

...in or about December,1910, human character changed...³

さて、Woolfはこのように人間の性格が変化した時期を“in or about December, 1910”と特定しているのだが、それはなぜであろうか？ まず、その問題から考えてみたい。

「1910年」というだけならば、その設定には大いに説得力がある。なぜなら、1910年という年は、英国がその現代史上でも数々の未曾有の出来事に見舞われた年でもあるし、一方、Bloomsbury Groupにとっても、その将来を大きく左右する出来事がいくつか起きた年であったからである。それらを順を追って記すならば、つぎようになる——

まず、公的出来事としては、5月にEdward VIIが死去し、それと共に俗物的価値観が幅をきかせる時代が終息する。(ちなみに、英国の歴史において、君主の名前がそのまま、その時代思潮を強烈に喚起し、形容詞にまで転用されている例は一体いくつあるだろうか？ Elizabeth I, Victoria, George VIなどと並んで、Edward VIIはそうした数少ない例の

ひとつと言える)。

一方、この頃 Liberal Party の権力が地滑りを起こし始めてもいる。かと思えば、同じ月に、新時代の到来を告げるかのように、英国で初めてハーリー彗星が観測されてもいる。9月には、木綿産業に携わる労働者たちによるロックアウトや Wales の炭坑夫たちのストライキが起きている。11月には、後に 'Black Friday' と呼ばれることになる18日に婦人参政権論者たちの過激なデモがあり、翌日には119名の女性運動家たちが逮捕されている。

つぎに、Bloomsbury Group 関連の出来事を挙げるならば、1月には、Roger Fry が Cambridge から London までの列車の中で偶然 Clive Bell, Vanessa Bell と乗り合わせ、意気投合し、これがきっかけで、Vanessa の妹の Virginia Stephen (1915年、Leonard との結婚により Woolf と改姓) を親しく知るようになる。また、同月に、Woolf はボランティアとして婦人参政権運動に加わり、翌2月には、英国王立海軍をまんまと欺いた *Dreadnaught* 号事件に加わり、彼女の一大特徴のひとつである桁外れの悪戯っぶり発揮している。9月には、Woolf が「物質主義者」として糾弾する Arnold Bennett の *Clayhanger* の刊行、10月には、Forster の *Howards End* が世に出て、高い評価を得ている。11月には、Roger Fry の企画になる 'Manet and the Impressionists' と題する展覧会が開催され(11月8日から翌年1月5日まで)、12月には、Forster が 'Friday Club' (Bloomsbury Group のメンバーのうち、Virginia の姉夫婦を初めとする芸術に携わる人々を中心となって、1905年に設立した内輪の会) で、'Feminine Note in Literature' と題するペーパーを読み上げている。

さて、上記の一連の出来事の中から、問題の「1910年12月ないしその頃」(“in or about December, 1910”) という時期だけに限って出来事を取り出すとするならば、'Manet and the Impressionists' と題する展覧会と Forster による 'Feminine Note in Literature' の朗読の2つということになる。そして、Woolf が「1910年12月ないしその頃に人間性が変化した」と記したとき、彼女の念頭にあったものはまさしくこれら2つの出来事であったと考えられる。

1つ目の展覧会については、本稿の〈はじめに〉で言及した拙論(1999)で詳細に述べたので、ここではその中の一節をそのまま引用するにとどめたい——「会場を訪れた人々の反応は凄まじいものであった。

寛大な者は笑いだし、そうでない者は激怒した。子供騙しのペテン、猥褻等々と毒づき、事務長を務めた Desmond MacCarthy に入場料の払戻しを求める者さえ出た。のちに MacCarthy は、芸術における新しいものは不道德な行為と同種の怒りをかきたてがちであると述懐している。」

だが、こうしたマネを初めとする後期印象派の絵画は、突如としてある種の人々に受容され、翌年 1 月 5 日の閉会までに夥しい人が足を運んでいる。まさしく、‘The Art Quake of 1910’ という MacCarthy の命名は、的を得ていたと言わざるを得ない。

つぎに 2 つ目の 12 月 9 日の Forster の朗読についてであるが、これに先立つ 10 月にも、かれは自分が所属する別の団体、“The Apostles” (G Tomlinson を中心に 12 人の学生によって設立された ‘The Society of the Cambridge Apostles’ なる団体。正式名称は ‘The Converzatione’) の会合でも同じ趣旨のペーパーを発表している。大戦前に限って言えば、この時期は、かれが新作 *Howards End* の大成功によって、その作家生活で最も高い名声を誇っていた時期にあたる。にもかかわらず、‘Friday Club’ でくだんのペーパーを朗読した前日、12 月 8 日のかれの日記には、“Let me not be distracted by the world. It is so difficult—I am not vain about my over-praised book, but I wish I was obscure again... I knew I shouldn’t and don’t enjoy fame.”⁴と記されていて、その成功を喜んでいる気配とはほど遠い。さらに、同日の日記の少し先には、“Don’t advance one more step into literary society than I have... Henceforward more work and meditation, more concentration on those whom I love.”⁵と記されていて、かれがこれを機に文学的サークルとは決別し、今後は、仕事や瞑想や愛する者たちに存分に時間をつかいたい意向を鮮明に示している。これらの事実を考え合わせるならば、George Piggford も言うように⁶、‘Friday Club’ での朗読は、かれにしてみれば「白鳥の歌」のつもりであったとも考えられ、また、もしそうであるならば、Nicola Beauman の言うように⁷、このときの朗読がかれと Bloomsbury Group との正式な関わりの契機となったことはまことに皮肉であったと言わざるを得ない。実際、翌年 11 月 23 日付の Forster の日記には、かれの肖像画を描きたいという Roger Fry の申し出をかれが了承した旨が記されている⁸ (ちなみに、Roger Fry のほかに、Bloomsbury Group の 3 人のメンバー、Duncan Grant, Vanessa Bell, それに、Strachey の恋人

Dora Carrington が彼の肖像画を手掛けている)。また、その翌月には、Forster はかれのインド旅行に備えて、Leonard Woolf から乗馬の手ほどきを受けており、かれと Bloomsbury Group との親交が深まりゆくさまがみてとれる。

Forster 本人は、自分が‘The Apostles’と‘Friday Club’で読み上げた件のエッセイは出版するにまったく値しないと考えていた。そのため、かれの死後、終の棲家となった King’s College, Cambridge の Archive Centre でその時の朗読原稿が見つかり、編纂と注記が施された形でそれが活字出版されたのはごく最近、2001年になってからのことである。従って、この Forster による断片的作物が公刊されるまでは、Virginia が彼女の“Mr. Bennett and Mrs. Brown”の中で特定した「1910年12月ないしその頃」(傍点一筆者)の出来事としては、「マネと後期印象派展」とみるのが通説になっていた。その意味で、このたびの Forster の自筆原稿の初公開は実に画期的な出来事であり、筆者がこの新資料を目にしたときの喜びは小さからぬものであった。これによって、先述の「日付」の問題のみならず、Forster とかれが関わった‘The Apostles’や‘Bloomsbury Group’についても、新たな遠近法が強いられることとなり、その結果、新しい発見や修正を余儀なくされることも大いにあり得ると感じたからである。

さて、以上の事から、Woolf が人間性の変化を1910年12月ないしその頃に設定した新たな理由が解明されたと思う。しかし、ここで再度、彼女の“Mr. Bennett and Mrs. Brown”に立ち返ることとし、今度は、「12月」という日付について事実関係の確認という形ではなく、心理学的見地から検討してみようと思う。彼女の“Mr. Bennett and Mrs. Brown”中、具体的に人間性が変化した時期に触れているのは、先述したほかに2か所あり、そこではいずれも「1910年頃」(“about the year 1910”)とだけ記されている。先述の一節も含め、それら3つを、言及がなされた順に抜き出し、番号を付してみると以下ようになる [引用部分の前後の脈絡については、必要に応じて、引用の後に補足説明という形で記してある]

- ① And now I will hazard a second assertion, which is more disputable perhaps, to the effect that *in or about December, 1910,*

human character changed.⁹ (*Italics—Author*) [この引用中、“a second assertion” とあるのは、その少し前の、“first assertion” (“everyone in this room is a judge of character”) を踏まえている]

- ② But a change there was, nevertheless; and since one must be arbitrary, let us date it *about the year 1910*.¹⁰ (*Italics—Author*)

[上記2つの引用①と②に挟まれる形で、「変化といっても、それはある日庭に出てみたら薔薇が咲いていたとか、鶏が卵を産んでいたというような、急激で決定的な変化とは異なる」という主旨の一文があり、ここで‘nevertheless’とあるのは、それを踏まえての言葉である]

- ③ All human relations have shifted—those between masters and servants, husbands and wives, and parents and children. And when human relations change there is at the same time a change in religion, conduct, politics, and literature. Let us agree to place one of these changes *about the year 1910*.¹¹ (*Italics—Author*)

上記3つの引用中、「12月」とまで絞りこんでいるのは①だけである。しかし、これも、“*in or about*” と表記し、時間軸をフレキシブルにしていること、さらには、時代精神の変化というもの、それがはっきり表面化するまでには時間がかかるのだと付言していることを考え合わせるならば、「12月」という日付のほうは彼女が「1910年」という年号に担わせた重さとは比較にならぬほど、軽いと言える。しかしながら、Woolfは「12月」へのこだわりを捨ててはいない。それは何故だろうか。結論から言えば、先述の Bloomsbury Group 関連の2つの出来事を極めて重大なものにとらえていたからである。換言すれば、英国史上未曾有の、しかも個人を超えた現代人全般にわたっての人間性・価値観の一大変化を促した要因として、国家的・社会的規模の出来事と並べて、それと同格のものとして、個人的営為を含めたかったのではないか。そして、実利的営みとは無縁の芸術的営みの重要性に寄せる彼女なりの信念、いとおしさ、誇りをそこにそっと忍び込ませ

たのではないだろうか。国家よりは友人を信じるという Bloomsbury Group 共有の信条が、あるいは、大蔵省勤務の Maynard Keynes が仲間内では肩身の狭い思いをしていたという事実がここで思い出されるのである。さらに言うならば、第一次大戦下、良心的徴兵忌避を願い出て、周囲の者から「高貴なる義務」^{ノブリス・オブリージ}を免れるとして糾弾されたとき、Lytton Strachey が答えた有名な台詞、「奥様、わたしが、皆様がそれを守ろうとして戦っておいで文明なのでございます」という台詞が彷彿としてくるのである。

〈Virginia Woolf と E.M.Forster〉

さて、ここで再び、場面を 1910 年 12 月 9 日の 'Friday Club' の会合に戻すとしよう。Woolf にとっては、Forster の "Feminine Note in Literature" と題する朗読内容は、彼女自身の文学観と基本的に符合するものであり、同じ作家として今まさに彼女が模索し選びとろうとしていた方向性の正しさを承認し、激励してくれるものであった。

当時、世間では、前世紀の遺風である俗物根性がまだまだ幅をきかせていたし、性の禁忌や隠蔽を当たり前とみなす風潮があって、言論の自由を著しく制限していた。しかし、言論の自由なしにはいかなる芸術の創造も不可能である。その上、Forster は、社会の忌むべき同性愛者でもあった（英国では同性愛は 1960 年まで法的犯罪であった）。個人的にも社会的にもそうした過酷な状況下にあって、旧弊に敢然と異を唱えるばかりか、おのれの信条を実践に移しながら世間的認知を受けている有名作家の言葉を、当時無名同然だった Virginia は一言一句聞き漏らすまいとして、聞き入っていたにちがいない。加えて、互いに同性愛者であるという仲間意識も彼女にはあったかも知れない。もっとも、同性愛者についての Strachey の分類に従うなら、Woolf はたぶんプラトニック派で、Forster のほうは実践派という違いこそあったが、Forster が *Howards End* 以後、*A Passage to India* を世に出すまでの 14 年間、小説の筆を断っていたのも、そして、*Maurice* を生前は出版しようとしなかったのも、そうした事情が背景にあったのことであった。

さて、Woolf が「人間性の変化」の分水嶺を「12月」に定めたとき、その心中には Forster の 'Feminine Note in Literature' を特筆したいとい

う切なる思いが働いていたと考えられる。世間を沸かしに沸かせた「後期印象派展」と、内輪の集まりでのささやかな、けれども極めて果敢な発表はともにモダニズムの頼もしい先駆けとして、彼女の中では同じ重さの意味合いを秘めていたのではないだろうか。一方、Forsterのほうでも、講演当日の日記に、“...Miss Stephen said the paper was the best there has been, which pleases me...”¹²と記していて、聴衆の中でもとりわけ Woolf の賛辞に喜びを覚えているさまが窺われる。しかし、翻って考えてみれば、当時、Bloomsbury Group のうちでは、Forster を除いてはまだ誰ひとり有名ではなく、かたや、Forster のほうは、折しも、最新作 *Howards End* によって高い評価を受けている有名人であった。この事実を考えるならば、Woolf の賛辞を日記の冒頭で特筆した Forster の記述は、今後のふたりの緊密な文学的関係を予告する最初のものとして興味深い。

Forster と Woolf が互いの文学活動を意識し合っていた度合いについては、たとえば、Woolf の *A Room of One's Own* を読むとよくわかる。女性と小説について書かれたこの評論は、彼女が18年前に聴きいった Forster の朗読、‘Feminine Note in Literature’ に大いに触発され、多大なヒントを得た作品と言っても過言ではない。そのときのかれの示唆の数々が、直接、間接に散見され、それらが彼女自身の独創性と見事に融け合っているのである。それを実証するひとつの例として、ここでは作家の性別とその作品との相関関係をめぐる両者の見解を合わせ提示したい――

Emma and Tartuff hold us to the exclusion of all else; they are the creations of the great artist who created them, and we do not stop to enquire whether the artist was male or female. We must admit then that the question of the feminine note is not really important in great literature. There personality dominates. Jane Austen is more Austen than a Jane... Or take the poems of Emily Brontë. What limitation <of sex>, what note of the feminine or the masculine, troubles her deathless passion?¹³

(E.M.Forster, ‘Feminine Note in Literature’)

...at fifteen she [Jane Austen] had few illusion about other people and none about herself...

.....
When the writer, Jane Austen, wrote down in the most remarkable sketch in the book a little of Lady Grenville's conversation, there is no trace of anger at the snub which the clergy-man's daughter, Jane Austen, once received. Her gaze passes straight to the mark, and we know percisely where, upon the map of human nature, that mark is.

(Virginia Woolf, "Jane Austen")

以上2つの引用からみてとれるように、Forster と Woolf にとって、偉大な文学を偉大な文学たらしめているのは、何よりもまず、“personal note” であって、“note of sex” はさして重要ではない。そして、両者が最も偉大な女性作家としてそろって Austen と Emily Brontë の名を挙げているのも興味深いことではある。

だが、両者に共通した見解はここまでである。Forster は、女性作家の作品では、ある登場人物が“moral cord” ないしは“standard” を具現し、その他の人物たちはこれに照らして描かれるのに対し、男性作家の作品では、登場人物が“standard” とするのは自らの内なる“unembodied ideal” である、と言う。かたや、Woolf のほうは、そうした相違の彼方に、偉大な作家に共通した一大特質を見、ついに「両性具有」(“androgyny”) という概念に帰着することになる。

Coleridge certainly did not mean, when he said that a great mind is androgynous, that it is a mind that has any special sympathy with women; a mind that takes up their cause or devotes itself to their interpretation. Perhaps the androgynous mind is less apt to make these distinctions than the single-sexed mind. He meant, perhaps, that the androgynous mind is resonant and porous; that it transmits emotion without impediment; that it is naturally creative, incandescent and undivided.¹⁵

(Virginia Woolf, *A Room of One's Own*)

だが、上記の作品が刊行される直前の Woolf の日記には、Forster や親しい仲間がここに “shrewd feminine note” を感じ取り、この作品を嫌うのではないかとの危惧が記されている。幸い、彼女のこのときの危惧の念は杞憂に終わったが、彼女が決然と反戦を唱えた次作 *Three Guineas* をめぐっては、Forster から、その “feminine note” 故に厳しい批判を受けることになる。だが、こうした両者の相違点（共通点以上に興味深い場合が多いのだが）については、紙数の関係上、稿を改めて論ずることとし、ここではただ現時点での筆者の結論——同じ文学というジャンルにたいし、Forster は人間主義に、一方、Woolf のほうは審美主義にたっていた——という結論を記すにとどめたい。本稿の論点はあくまでも「1910年12月ないしその頃」という日付をめぐってのそれであり、その後のふたりのありようは後日談に属するからである。

〈おわりに〉

筆者が本稿の〈はじめに〉で言及した拙論「Bloomsbury の貴族たち」を著したのは、今から11年前のことで、Noel Annan の言葉をかりれば、「文化という株式市場で常にその株価が変動してきた Bloomsbury」の株価が、欧米でちょうど上がり始めた時期であった。

その後の Bloomsbury Group 関連の刊行物数、The Virginia Woolf Society of Great Britain の設立(1999)、さらには、関連の行事、映画、芝居の数の大きさから判断するならば、欧米のみならず、わが国においても、その株価は、以来、上がることはあっても、下がる事はなかった、と言えると思う。

今日、われわれは国家間の、人種間の、男女間の、あるいは、自然と人工物の間の境界線が危うくなりつつある世界に生きていて、さまざまな価値観の共存を許容せずには、個人は言うに及ばず、人類と地球そのものの存続すら危ぶまれる事態に直面している。Bloomsbury Group 株が、今日なお高値を更新しているのは、David Gadd をして、「無差別な乱雑さ (promiscuity) に墮すことなく、寛容さ (permissiveness) を創始した」と言わしめた Bloomsbury Group から何か価値ある指針をわれわれが今なお得られると感じているからではあるまいか。Bloomsbury Group の活況ぶりについては、その寡黙ぶりが愛すべき一大特色であった仲間のひとり、Saxon を引き合いに出しながら、James Beechey が次

のようにユーモラスに表現している——

As the old Bloomsbury joke goes, only Saxon Sydney-Turner: The Untold Story remains unwritten—for now.¹⁶ だが、このGaddにあえて異論を唱えることが許されるならば、Bloomsbury Groupという鉱床は、得も言われぬ形状と色彩を備えた鉱石を今なお秘め、しかも、その鉱床の奥行きは複雑にして深いという様相を呈しているのです。筆者を含め、このグループの面々とその数々の業績に関心を寄せる人々の掘削作業はまだまだ続きそうである。

注

- 1 村松加代子。「ブルームズベリーの知的貴族たち」、『跡見英文学第4号』。跡見学園女子大学、1994。
- 2 Forster, E. M. *Feminine Note in Literature*. Ed. with an Introduction by George Piggford.
- 3 Woolf, Virginia. “Mr. Bennett and Mrs. Brown” in *Collected Essays. Vol.1*. New York: Harcourt, Brace & World, INC, 1967. 319-21.
- 4 Qtd in ‘Introduction’ by George Piggford to *Feminine Note in Literature*. 7.
- 5 Ibid., 7.
- 6 Ibid., 7
- 7 Ibid., 7-8
- 8 Cregan-Reid, Vybarr, “Only Connected: Forster, Writing and Bloomsbury 1910-1914” in *The Charleston Magazine*. Issue. 24. , The Charleston Trust, 2001. 28.
- 9 “Mr. Bennett and Mrs. Brown”. 320.
- 10 Ibid., 320.
- 11 Ibid., 321.
- 12 *Feminine Note in Literature*. 6.
- 13 *Feminine Note in Literature*. 19.
- 15 Woolf, Virginia. *A Room of One’s Own*. London: The Hogarth Press, 1978.
- 16 Beechey, James. *A Review on On or About December 1910: Early Bloomsbury and its Intimate World* by Peter Stansky in *The Charleston*

Magazine. Issue. 15, The Chavleston Trust, 1997. 48.

引証文献

- Beuman, Nicola. *A Biography of E.M.Forster*. London Sydney Auckland: Hodder & Stoughton, 1993.
- Bell, Quentin. *Bloomsbusy*. London:Weidenfeld & Nicolson, 1986.
- *Elders and Betters*. London: Pimlico, 1997.
- *Virginia Woolf: A Biography*. London: The Hogarth Press, 1990.
- Elert, Kerstin. *Portraits of Women in Selected Novels by Virginia Woolf and E.M.Forster*. Umea: Acta Universitatis Umensis, 1979.
- Forster, E.M.. *Virginia Woolf*. Cambridge: Cambridge U.P.
- *Two Cheers for Democracy*. London: Edward Arnold & Co., 1951.
- Hussey, Mark. *Virginia Woolf A to Z: A Comprehensive Reference for Students, Teachers and Common Readers to Her Life, Work and Critical Reception*. New York: Facts On File, Inc., 1995.
- King, Francis. *E.M. Forster*. London: Thames and Hudson, 1978.
- Mulk, Raj Anand. *Conversations in Bloomsbury*. London: Wildwood House, 1981.
- Spalding, Frances. *The Bloomsbury Group*. (Character Sketches Series). London: National Portrait Gallery, 1997.
- Stansky, Peter. *On or About December 1910: Studies in Cultural History*. Cambridge, Massachusetts, London, England: Harvard U.P.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf. Vol.I, Vol.III, Vol. VI*. Ed. by Anne Oliver Bell. London: The Hogarth Press, 1980.
- *The Letters of Virginia Woolf. Vol.2.The Question of Things Happening*. London: The Hogarth Press, 1976.
- *A Room of One's Own*. London: The Hogarth Press, 1978.
- The Charleston Magazine. Issue 15, Issue 24*. The Charleston Trust.